

## 平仲物語の構成

森 本 茂

平仲物語は伊勢物語、大和物語とともに「歌物語」とよばれ、平貞文を主人公にした三十八段の小話から成っている。

この物語の作者を、貞文自身と考える説と、貞文以外の者と考える説とあって、現在のところどちらとも決めてがないのであるが、平仲物語十四段に「まず平中、……とよみけり。」と「平中」の名前をだしている点からみて、また貞文と肩を並べるその頃の歌人には、例えば躬恒集、是則集、貫之集、伊勢集、本院侍従集、遍昭集のように、その成立編纂に疑問はあるにしても、家集が残っているし、特に貞文と交渉のあった(恋愛関係)伊勢の御と本院侍従に家集がある点等からみて、貞文自記の貞文集があって、それに基づいて、貞文以外の誰かが平仲物語を作ったろう、とする立場にたつて稿を進めていく。

さて平仲物語は平中日記、貞文日記ともよばれて、物語と日記と両方の呼名をもつ一群の作品の仲間入りをしている。一群の作品とは、伊勢物語―在五中将日記、和泉式部物語―和泉式部日記、多武峯少将物語―高光日記、篁物語―篁日記等である。

殿(時平の子藤原顕忠)とあって、「誠や、楡の隈河は……」以下を後の時代の附記と考える点は、萩谷朴氏、目加田さくを氏とも一致していて、この部分以外の平仲物語すなわち原平仲物語は、顕忠が右大臣に任官した天徳四年(九六〇)以前、およそ延長年間(九二三〜九三〇)に成立したろうと、目加田氏はのべておられる。

両書とも現存本と原形本との間に生成の過程があって、両書の比較に困難を覚えるのであるが、現存本に基づいていつて原形本の形態も推論していく外はない。

## 注1 「平仲説」

清水泰「平貞文(平仲)伝の一考察」(立命館文学、昭和二十四年十一月)

目加田さくを「平仲物語論」

「平中説」

宮田和一郎「王朝三日記新釈」解題

萩谷 朴「日本文学史、中古」(至文堂)

「不明」

山岸 徳平「平中物語」解説(日本古典全書)

秋山 虔「平中物語」解説(日本古典文学全集)

現状ではいずれとも決めかねる。本稿では「平仲説」に従っていき。

注2 三十八段、三十九段、四十段と、以上三つの分け方があるが、本稿では、宮田氏、萩谷氏のとられた三十八段のテキストに従っていく。

平仲物語の構成

ところで平仲物語と伊勢物語の諸段を各々物語形式の面から分類してみると、平仲物語は伊勢物語の形式から見るかに進んだ形式のもとに、物語化も進んでいる。そして、和泉、多武峯、篁物語を生みだす基盤になっていると思われる。

そこで、平仲物語の構成について、私は内部徴証にもとづいて文の形式とその展開の相を中心に述べていきたいと思う。初めに伊勢物語と平仲物語の成立年代について考えてみなければならぬ。

伊勢物語の成立については、古来多くの説が行われているが、いま福井貞助氏の御説によると、「透視される原体はおそらく四季、恋、雑、賀、哀傷などという様な整理された歌集、業平家集であるらしい。業平の詠草がある程度他歌の増加もあり、この様に整理された本があった。これをもとにして歌物語に構成」して、「古今集等の歌を吸収」して、「勢語の形成は古今より後撰の時代へかけて最も盛んであったろうがそれ以後もつづく」と見られる。」とのべておられる。

平仲物語の成立については、三十八段の後半に「富小路の右大臣

にそろえた。

注3 目加田さくを「平仲物語論」

注4 宮田和一郎「王朝三日記新釈」

萩谷 朴「日本文学史、中古」(至文堂)

池田 亀鑑「物語文学」(至文堂)

今井 卓爾「平安時代日記文学の研究」

注5 福井 貞助「伊勢物語の生成」(解釈と鑑賞、昭和三十一年十一月)

## 二

近藤忠義氏は「日本文学原論」の中で、「伊勢物語の構成」について言及し、「単純に短歌とその詞書とから成るもの」、「詞書の延びたもの」、「あと書きを添へたもの」に分け、「独立せる短歌が贈答歌である場合も亦同様」であり、「それらの各々が物語構成上謂はば「単位」をなして、「これらの単位を二単位以上連結することによって、…構想上の複雑性―正確に言へば『和歌的』なるものから『物語的』なるものへの発展―をもたらずに至って居る」とのべて、具体的に伊勢物語の本文を引いて説明しておられる。

物語形式をこのように分類してみるのには至極当然の方法であるが、私は以下実際に分類するに当って、便宜上(一)から(四)までの形式にまとめ、しかも「詞書の延びたもの」と「あと書きを添へたもの」とを一つの単位にくくって(二)とした。

さて、この方法で伊勢物語と平仲物語と較べてみると、平仲物語では二単位以上連結した場合が全体の割合でずっと多くなっている。次に形式面から比較してみる。

## (一) 単純に短歌(贈答歌)とその詞書とから成る形式

伊勢物語(岩波、日本古典文学大系本)

昔、色好みなりける女、出でていにければ、  
 などでかくあふごかたみにりにけん

水もらさじと結びしものを (二十八段)

こういう形式は伊勢物語では他に、十一、二十六、二十九、三十、三十五、三十六段等みなどで三十段余あり、贈答歌の場合は、十三、十七、十八、二十、二十五段等、約二十段ある。以上約五十段は、業平集の素朴な形態を残していると思われ、物語化のおくれた形式である。

平仲物語ではどうであろうか。

平仲物語(宮田氏「王朝三日記新釈」本)

又この男、大方なるものから、時々をかしき事はいひけり。それに桜のいみじう面白きを折りて男のいひやる。  
 咲きて散る花と知れるを見る時は

心のなほもあらずもあるかな

女返し、

年ごとの花にわが身をなしてしが

君が心やしばしとまると (八段)

平仲物語では(一)に属する形式は右のように贈答歌であるものばかりで、五、八、十、二十一の四つの段である。

## (二) 詞書の延びた形式、あと書きを添えた形式

詞書の延びた形式とあと書きを添えた形式と別々にあげるべきであらうが、「詞書を延ばす」試みは同時に「あと書きを添える」試

みに直結する性質のもので、物語化にふみ切る段階は同時であると考えられるからここでは一緒に扱う。

平仲物語

又この同じ男、この二年ばかり、物いひすさぶる人ぞありける。いかでなほ対面せむといふ心ぞ切にありける。返りごとに女かくなむ。

わたつうみの底にあらたるみるめをば

三年漕ぎてぞ蟹は刈りける

男返し

うらみつ春三返りを漕がむまに

命絶えずはさてややみなむ

かかる程にこの男「死ぬべく病みてなむ」と告げれば、問はでやみにければ、さてやみにけり。 (四段)

詞書の延びた、あと書きを添えた、という言い方は、和歌を主に考え、地の文を従としていた段階のことは、四の形式はこの主従を逆にした場合である。

さて(三)の形式は伊勢物語では一、二、三段等、約六十段、平仲物語では三、四、六、十二、十四、十六、二十、二十三、二十四、二十六、三十、三十一、三十三、三十七段で十四段ある。この形式を(一)の形式と比較してみると、時間的に幅広くなっているところに特色がある。

## (三) (一)と(二)の形式が二回以上連結した形式

伊勢物語の二十一一段は四つの単位が連結していることを近藤氏は具体的に説明しておられるが、平仲物語でこの形式を求めると

平仲物語

又この男、久しう物いひわたる人ありけり。「程経ぬるを、みづからいかむ」といへば、返りごとと女、

あふ事のとほたあふみなる我なれば

勿来の関もみちのまぞなき

男返し、

勿来てふ関をばすゑであふ事を

ちかたふみにも君はなきなむ

かういへど、この女更にあはず、上衆めきければ、男いひわびて

物もいはざりければ、いかが思ひけむ、女いひたり。

思ひあつみ袖こがらしの森なれや

頼む言の葉もろく散るらむ

返し、

君恋ふと我こそ胸はこがらしの

森ともわづれ影となりつ

(十五段)

右の段は、「勿来てふ」の歌までが一単位「かういへど」以下が一単位、都合二単位の連結で成立している。この単位が三回、四回、五回……と回を多く連結していくと、当事者間の心理の展開が持続的に表現できるようになる。

こういう形式は伊勢物語では、二十一、二十二、二十三、二十四、五十段等十段余あるし、平仲物語では、一、二、七、九、十一、十三、十五、十九、二十九、三十二、三十五、三十八段で、十二段ある。右に引用した十五段は単位の連結といっても二回限りであって、単純な結合の部類に入るが、右にあげた諸段の中にはもっと多くの

結合しているのがみられる。

ところで単位の連結が多くなっていくと、連結の仕方がうまくいかないで、思わぬところで作者がボロを出すことがある。平仲物語の二段は五つの贈答歌が連結してあるが、贈答歌に対して答歌がどうしても意味の上から続かない。同じ歌が伊勢集にもあるから対照してみると、どうやらこのところは、伊勢集が誤り混入したらしいと考えられる。これは作者のミスか、あるいは平仲物語増補途中の偶然的な混入なのか、あるいは他に原因があるのか、いまのところはつきりしていない。

外に三十八段の後半の部分について、後の時代の増補か、という説が行われている。

右の二段と三十八段とは問題が残るとしても、他の段に関しては一応整然と連結が行われている。「整然と」といったが、この「整然とした連結」というのは、実は平仲物語作者の編集の過程を経たものであった、と考えられる。一段と九段とは、特に編集のあとがうかがえるから、この二段について次に述べてみる。

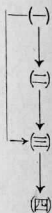
平仲物語は平貞文を主人公にした物語というだけで、お互の段はまったく関連をもたない断片的な小物語と考えられている中にあって、萩谷朴氏が「四期の順序を逐った形跡がみられ、母胎となった貞文集との密接な関連を物語っている。」(日本文学史、中古)と指摘された。各段のうち季節や月のはっきりしているものを順に整理してみると次のようになる。秋・冬・春・翌春(一段)秋・冬・司召・翌春の司召(二段)秋・菊・月・春(五段)正月の一日の日、六段一鶯、七段二月、八段一桜)春・夏・秋(九段)桜・た

にもかく・白露)夏(十二段―夏の夜の月・ほととぎす)秋(十三段―七月七日、十四段―をみなへし、十七段―月、十八段―すくもび、十九段―菊・月、二十、二十一―菊、二十二、二十五、二十七、二十九段―月、三十段―もみぢ)冬(三十二段―霜月の一日の日)春(三十三段―花摘み、三十四段―桜・春のはてがた、三十五段―春)秋(三十六段―その年の秋)

一段は「男(平仲)がもう一人の男(時平)とある女を得たいと競っていたが、さいわいに女を得た。ところがその為にもう一人の男がこの男にさんざん無礼な態度をした。そこでこの男は宮仕えもいやになりぶらぶらしている内に免官になる。出家したいと思っても両親の許しが得られないし、しかたなく友人たちと酒を飲んで、氣をまぎらわしたりして日を送っていた。春の司召に音沙汰なく、翌春の司召もすぎ、その直物によくやくもとの官よりも少しよい官に復した。」というストーリーで、「今は昔、男二人して女一人をよばひけり。」で始まり、「時しもあれ、秋の頃にさへありければ」(秋)、「斯かる程に冬になりぬれば」(冬)、「その司召に空しうなりぬれば」(春)、「その司召にかゝらずなりにけるに」(翌春)というように季節をおってのべていく。

ところで一段と九段とだけが三つ以上の季にまたがっている。これはどういふわけであろうか。

一段の中では男が官をとりあげられ、悶々とした毎日を送っているうち、友だちがやってきて月の夜酒をくみかわして心を慰めるところ(秋)が一番しみじみした趣があり、また文量も全段の三分の二を占めている。そして古今集や古今六帖、拾遺集にもっている



(三)の形式の発展したものが(四)の形式である。(三)では「和歌に詞書や、詞書の延びたものや、あと書きを添えた」一単位が二回以上連結した形式であって、その一単位の中ではまだ和歌が主の立場を確保していた。ところが本来贈答歌は「和歌による会話」なので、贈答歌が連結していくうちには、自然と地の文の会話に転向していく。(3)に属している平仲物語の中で例えば次のようにその傾向がみえてきた。

1 (男)が知りあいの女にくるようになると、その女は美しい女友達を連れてきた。男の家までくるとその女友達は「もう送ったので用はないから帰ります。」という。男は「今夜だけでも泊っていきなさい。」という。女友達は「まあ、いやらしい」とはいうものの( )

女 難波瀧おきても行かむ蘆田鶴の  
声ふり出でて鳴きもとどめよ

男返し、

男 難波江の潮満つまでに鳴く田鶴を  
又いかなればおきて行くらむ

女 「あなそらごと。露だにおかぎめるものを」

( )とはいったが、どういふわけか、その夜女友達は泊って帰った。(二十三段)

2 (この男が、この男に反感をもっている男達によってくだらないうデマや噂をたてられたので、この男は「気晴しでもしよう」

歌「憂き世にはかどさせりとも見えなくになぞもわが身の出でがてにする」(一段十首の歌のうち、この歌だけ他集に入っている)は秋の部分に入っている。また北村季吟の「大和物語抄」の巻末ののっている平中説話(数段あって平仲物語の異本の断片と思われる)では、一段の秋の部分の終りに近いところから、冬・春の部分は全く本文なく、「さりける程にいと深からぬ事なりければもとの官になりけり。この友だちどもは躬恒友則がほどなりけり。」で結んでいる。すなわち巻末説話では一段はほとんど秋の話である。なお一段の最初の部分について岸岸平氏は「成立当初の本文に、あとから註のやうなものが混入したのではないかと考へられてゐる。」とのべておられる。

こういう点から考えると、一段はまずまず秋を中心にまとまってくるのである。おそらく一段は、秋の話を中心にして前後の話は適宜その位置に編集したのであつたらう。最初の段であるし、貞文集を物語化する時の作者の編集意識は他の段以上に強かつたのであろう。

九段では、春桜の花の小枝につけて、女と恋の歌をよみかわして、「その夜はよそながらかへりにけり」「あしたに女のもとより」「くれにきたり」「あけぬれば帰らぬ」という具合に春の部分が最もくわしく、文量も全体の半分以上である。一段と同様な事情のもとに春を中心にして編集したのであろう。

(四) 地の文が和歌を包む形式

これまで(一)(二)(三)の形式に分けてのべてきたが、物語形式の発展の面から一応整理してみると次のようになる。

男 「かうてなむまかる。憂き事など慰みやする」

女 世の憂きを思ひながすの浜ならば  
といへりければ、

男 憂き事よいかで聞かじと被へつと  
とある返し、

女 我がへともに行くべきものを  
ちがへながすの浜ぞいざかし  
とていにけり。

(その後、男は長州の浜に行った。……) (三十五段)

右の傍線を引いた二箇所は本来和歌でいふべきところである。それが他の文中の会話に転向している。こういうように転向が限りなく続いていくところに、他の文が和歌を包む形式が生れてくる。伊勢物語では、六、九、六十五、六十九段等約十段、平仲物語では、十七、十八、二十二、二十五、二十七、二十八、三十四、三十六段の八つの段である。

以上(一)から(四)までの形式を通して伊勢物語と平仲物語の諸段を分類してみた。もちろんこういう形式は(四)の項で図示したように発展段階に応じた呼名である為に、数学的に区分するということはできない。特に(三)と(四)の区別はそうである。ただ両物語の各段を物語形式の段階から比較する為に、傾向性として試みたのであった。以上の結果を次に表にまとめておく。

伊勢物語(百二十五段)	(一)	約五十段	約六十段	約十段	約十段
	(二)	約十段	約十段	約十段	約十段
平仲物語(三十八段)	四段	十四段	十二段	八段	

注1 (三)と(四)の形式の関係は、後述するように、(三)の発展したのが(四)の形式と考えられる為、(三)と(四)とを厳密に一線をかくすることはできない。

注2 山岸徳平「平中日記」解説(日本古典全書)

### 三

次に伊勢物語と平仲物語と比較してみると、平仲物語には贈答歌が多くなっているのが特色である。贈答歌の回数を見ると伊勢物語では、一回―三十二(三十二の段の意)、二回―七、三回―二、平仲物語では一回―十六、二回―二、三回―五、四回―四、五回―一、十回―一、という結果になっている。特に九段では十回も続いている。平仲物語三十段では贈答歌の後に「返しまさりなりける」とあって、物語作者が批判している。貞文集には多くの贈答歌が入っていたろうが、それを物語に移しかえる際に、物語の作者は時にうかつにも批判者意識が頭をもたげて「返しまさりなりける」とか、「まざる中」(十四段)とか口をすべらせてしまう。

さて貞文集には贈答歌が多かったろうとのべたが、これは貞文の生きた時代の背景からみても首肯される。

「古今和歌集目録」や「勅撰作者部類」や「拾芥抄上」や「中古歌仙三十六人伝」によると、貞文(定文)は右兵衛少尉や参河介を経て従五位上、左兵衛佐兼参河権介になっている。そして没年は「古今和歌集目録」では延長元年九月二十七日、「中古歌仙三十六

人伝」では延長六年になっている。清水泰先生は「彼の官曆から見ても」「又元年と六年とは元と六との文字の類似から来た相違」とみて、「元年に従ふべきであらう」としておられる。いま延長元年(九二二)没として、五十余歳で没したという一般の考えに従うと、彼の生れたのはだいたい貞觀元年(八七三)以前数年頃かと推測される。延喜五年(九〇五)には古今集が撰進(貞文の和歌九首)され、天曆五年(九五二)には後撰集(同六首)が撰進されている。後撰集は貴族の風流生活を反映した歌が多く、贈答歌が多いのを特色としている。

島田良二氏の調査された結果をまとめてみると、

古今集時代の歌人の家集(業平集、遍昭集)の贈答歌は少く、あっても一对の贈答で終わっていて、連続的なのは少く、詞書も短い。後撰集から拾遺集時代の歌人の家集(躬恒集、深養父集、貫之集、忠岑集、千里集、是則集等)には贈答歌が多くなっている。(筆者意訳)

右の調査に基づいてはつきりしている範囲内で大体に死没の年を基準にしてこれらの人々を年代順にしてみると、

業平(八八〇没)、遍昭(八九〇没)、躬恒(九二一晩年)、貞文(九二三没)、是則(九三〇没)、忠岑(九三九没)、貫之(九四五没)となる。死没の年代だけで判定することは無理ではあるが、一つの足がかり程度に考えてみても、貞文集は「古今集時代の歌人」の家集の形態をいくらか残しながらも後撰集時代の歌人の家集のように圧倒的に贈答歌が多かったろうと思われる。またこのことは、平

仲と親交のあった伊勢集に贈答歌多く、ほとんど歌物語の観があるのをみても充分に推測される。伊勢物語に較べて平仲物語に贈答歌が多いのは、そもそも業平集と貞文集との間において貞文集の方に贈答歌が多かったところに起因していたろう。

さてふたたび平仲物語の贈答歌にかえるが、贈答歌を連結していく間に時間的要素を加味するようになる。ここに贈答歌の連結が物語化を進めるといふ重要な意味をもっている。だいたいの間において本来和歌は瞬間的次元に属するから一首の和歌の中に時間的経過を折込もうとしても、それは所詮観念的、理想的になって実感を伴わない。例えば「袖ひちてむすびし水の氷れるを春立つ今日の風や解くらむ」(古今、巻一)の和歌では夏・冬・春を織込んではいるが観念的なものに流れてしまっている。

このような一首の和歌の時間的要素に対する限界を破って、もっと連続の相を表わしたいとする方向の中に贈答歌は位するもので、一回、二回、三回……と連結していくと、ますます時間的要素をまわしてゆく。そして前の贈答歌から次の贈答歌へ連るその間に、経過の順序をあらわす言葉挿入するようになる。

平仲物語では時を示すのに「正月一日の日」「七月七日」「霜月一日の日」以外は「二月」「七月」のように月名で示したり、「桜」「花摘み」「月」「菊」「鶯」等のように季や月を暗示する言葉で示したり、また「春」「夏」「秋」「冬」という四季の呼名によっている。例えば土佐日記で「元日。なほ同じとまりなり。」「二日。なほ大湊に泊れり。」「三日。同じ所なり。」というように七日まで続いているのと較べると大きなちがいである。平仲物語で

はなるほど月や季を追って各段が配列してあっても、結局四季の風物は仲立ちにすぎなかった。この四季の風物を連ねてとめどもなく流れていく時間の経過の中にこそ、恋の喜びもあり、また悲しみもあったのである。平仲物語では「経過の順序を示すことば」が意識的にたくさん使っている。

又の夜、かかる程に、かういふ間、ありわたる程、程経にければ、得て三四日ばかり、その程、いふ程に、年月経にけり、程久しく、年月になりぬ

贈答歌にこれらの言葉が結びついて物語化を進めていった。

注1 この一は二段だが、実はこの段は伊勢集が誤り混入したとみられる節があつて、贈答歌を数える場合も問題をはらんでいるが、ここでは一応そのままに入れて物語の通りに数えた。

注2 清水 泰「平貞文(定文)伝の一考察」(立命館文学、昭和二十四年十一月)

注3 島田良二「歌物語的形態の側面的一考察」(国語と国文学、昭和三十三年九月)

### 四

一の項で簡単に触れたが伊勢物語の成立には長い年月と改変があったが、現存本伊勢物語を基に(一)から(四)まで分類した結果によると、物語の形式面からして(一)と(二)が百十段近くあり(三)と(四)が約二十段特に(四)のように發達した形式もあることを考え合せてみて、これらのすべての段が同時に成立したとは考えられず、原伊勢物語はどうしてもこの百十段近くの段の中に求められなければならない。その

後、古今集から後撰集の頃にかけて(三)や(四)に属する段あたりが増補されていったと考えられる。

そしてその増補の時代に近く平仲物語が成立したものと考えられる。平仲物語では、三十八段の後半の部分は、内容からみて、官位からみて天徳四年(九六〇)以後に増補されたことは確実だから、他の段はおよそ延長年間(九二三—九三〇)に成立したとみて、古今集撰進の延喜五年(九〇五)から後撰集撰進の天曆五年(九五二)にかけて、この頃に平仲物語が成立した伊勢物語も増補されたと考えられる。

さてこういうふうな成立の問題を考え、その上にたつて原伊勢物語と考えられる諸段と平仲物語とを比較してみても、(二)と(三)の結果をまとめてみると次の通りである。

1 平仲物語には二回以上の単位の連結または地の文の発達した形式が多い。

2 平仲物語には贈答歌が多く、意識的に時間的要素を織込んでい

る。さてその作品の価値は形式と内容との統一した姿としてとらえなければならぬが、こういう見地からみて伊勢物語から平仲物語への展開は、どのようにとらえたらよいのであろうか。

原伊勢物語では全体を業平の自伝体風にまとめようとする編集的態度はみえても甚だ雑ばくなもので、時間的要素の乏しい短い事件の段を積み重ねた、というものであった。ところが平仲物語になると、全体的に編集的態度をもちながら、各段の事件の中では時間的要素を意識的に用いて二回以上の単位を連結し、贈答歌を連結し、

こうしていく中に自ら平貞文の人間像を物語的に浮上らせようとしている。

伊勢物語と並んで同じ歌物語といっても、内容形式的に伊勢物語の線をもう一步物語化の方向に進めたところに平仲物語の価値がある。

しかしながら歌物語という枠内での試みであったが為に結局は各段の範囲内でのことだった。この枠を破って全篇を貫くテーマのもとに、持続的に物語ろうとする動きが次代に到来する。これが和泉式部物語、多武峯少将物語、篁物語であった。これらの作品の成立はみな平仲物語におくられること数十年から百年の頃と考えられている。

結局平仲物語は、原伊勢物語をうけて各段の枠内で精一杯に物語化をおし進めた作品であり、和泉式部物語や多武峯少将物語や篁物語を生みだす基盤をきざいたという過渡的な意味において特に注目し得る作品といふべきであらう。

(昭和三十四年七月十五日脱稿)

## 堤中納言物語の研究史的考察

——富士谷御杖の研究について——

土 岐 武 治

になる。

(1) 静嘉堂文庫蔵富士谷御杖本

この本は、富士谷御杖(一七六八—一八二二)の所蔵本を祖本となして、中務少輔泰行が書写したものである。奥書にも

〔墨〕以北辺蔵書官暇書写如本加朱筆

とある。泰行(一七七八—一八五八)については、公卿補任 光格天皇 文化六年の条に

従三位 安泰行 一三月廿三日叙。故従三位有儀叙男。母故前権大納言通貫卿女。享和元七二十叙従四位上。(廿三歳。去正五分)。

同二正十四転中務少輔。(廿四歳)。文化二正五叙正四位下。(廿七歳)

とあり、また孝明天皇安政五年の条にも

従二位 同泰行 八十二月十九日叙正二位。(雖無家例。齡及八旬重病之間被宥許。不可為後例)。同月二十日薨。

と伝へるのである。

富士谷御杖(一七六八—一八二二)の伝記については、「近世三十六家集略伝」の上巻に、次の通り記載している。

翁(成章)の一男成寿のち御杖と改む。父の志を嗣て其徒を教示す。最歌文章一鉢をなして超出せり。世々鳴、代々柳川侯京邸の守たり。御杖翁また彈箏に妙手なり。自ら雲井の曲と称する妙曲を製作して其徒に授く。馨者の徒においても、秘曲と称へて伝ふとぞ。文政五年歿す。所著の書、百家類業・百家部類抄・歌道非唯抄・歌袋・詞業新雅・同二編・いれひも・古事記燈・万葉集燈等なり。其佗何燈と称する諸書注釈甚多——

このように御杖は父成章(一七三八—一七七九)の学統を継ぎ、特に和歌に名のある、京都の国学者の一人である。

御杖の堤中納言物語に関する研究資料としては、今のところ静嘉堂文庫蔵富士谷御杖本堤中納言物語に伝へる書込みと、他に御杖の随筆書である北辺隨筆(刊本 四卷)中に収載する多少の資料とが現存するものである。いま、これら両本の概略を解説すれば次の通